

# 源氏物語

## 朝顔卷

与謝野晶子訳



一冊堂青空文庫



源氏物語

朝顔

紫式部

與謝野晶子訳

みづからはあるかなきかのあさがほと

言ひなす人の忘れぬかな　（晶子）

齋院は父宮の喪のために職をお辞しになった。源氏は例のように古い恋も忘れることのできぬ癖で、始終手紙を送っているのであったが、齋院御在職時代に迷惑をされた噂うわさの相手である人に、女王にょおうは打ち

解けた返事をお書きになることもなかった。九月になって旧邸の桃園の宮へお移りになったのを聞いて、そこには御叔母おばの女五によごの宮が同居しておいでになったから、そのお見舞いに託して源氏は訪問して行った。故院がこの御同胞はらからがたを懇切にお扱いになったことによつて、今もそうした方々と源氏には親しい交際が残っているのである。同じ御殿の西と東に分かれて、老内親王と若い前斎院とは住んでおいでになった。式部卿しきぶきょうの宮がお薨かくれになつて何ほどの時がたっているのでもないが、もう宮のうちには荒れた色が漂つていて、しんみりとした空気があつた。女五の宮が御対面あそばして源氏にいろいろなお話があつた。老女らしい御様子で咳せきが多くお言葉に混じるのである。姉君ではあるが太政大臣の未亡人の宮はもっと若く、美しいところを今も

お持ちになるが、これはまったく老人らしくて、女性に遠い気のする  
ほどこちこちしたものごしでおありになるのも不思議である。

「院の陛下がお崩れかくになってからは、心細いものに私はなって、年の  
せいからも泣かれる日が多いところへ、またこの宮が私を置いて行っ  
ておしまいになったので、もうあるかないかに生きているにすぎない  
私を訪ねてたずくださったことで、私は不幸だと思ったことももう忘れて  
しまいそうですよ」

と宮はお言いになった。ずいぶん老人としよりめいておしまいになったと思  
いながらも源氏は畏かしこまって申し上げた。

「院がお崩れかくになりました以来、すべてのことが同じこの世のことと  
思われませんような変わり方で、思いがけぬ所罰も受けまして、遠国

さすら

に漂泊さすらえておりましたが、たまたま帰京が許されることになりましたと、また雑務に追われてばかりおりますようなことで、長い前からお伺いいたして故院のお話を承りもし、お聞きもいただきたいと存じながら果たしえませんでしたこともんもんで悶々としておりました」

「あなたの不幸だったころの世の中はまあどうだったろう。昔の御代もそうした時代も同じようにながめていねばならぬことで私は長生きがいやでしたが、またあなたがお栄えになる日を見ることができたために、私の考えはまた違ってきましたよ。あの中途で死んでいたらと思うのでね、長生きがよくなったのですよ」

ぶるぶるとお声が震う。また続けて、

「ますますきれいですね。子供でいらっしった時にはじめてあなたを

見て、こんな人も生まれてくるものだろうかとびっくりしましたね。それからもお目にかかるたびにあなたのきれいなのに驚いてばかりいましたよ。今の陛下があなたによく似ていらつしやるという話ですが、そのとおりには行かないでしょう、やはりいくぶん劣っていらつしやるだろうと私は想像申し上げますよ」

長々と宮は語られるのであるが、面と向かつて美貌をびぼうほめる人もないものであると源氏はおかしく思った。

「さすらい人になっておりましたころから非常に私も衰えてしまいました。陛下の御美貌は古今無比とお見上げ申しております。あなた様の御想像は誤っておりますよ」

と源氏は言った。

「では時々陛下を拝んでおればいつそう長生きをする私になりますね。私は今日でもう人生のいやなことも皆忘れてしまいましたよ」

こんなお話のあとでも五の宮はお泣きになるのである。

「お姉様の三の宮がおうらやましい。あなたのお子さんを孫にしておられる御縁で始終あなたにお逢いしておられるのだからね。ここのお亡<sup>な</sup>くなりになった宮様もその思召しだけがあつて、実現できなかったことで歎息<sup>たんそく</sup>をあそばしたことがよくあるのです」

というお話だけには源氏も耳のとまる気がした。

「そうなつておりましたら私はすばらしい幸福な人間だったでしょう。宮様がたは私に御愛情が足りなかったとより思われません」

と源氏は恨めしいふうに、しかも言外に意を響かせても言った。



によおう

女王のお住まいになつてゐるほうの庭を遠く見ると、枯れ枯れになつた花草もお魅力を持つもののように思われて、それを静かな気分でながめていられる麗人が直ちに想像され、源氏は恋しかった。逢いたい心のおさえられないままに、

「こちらへ伺いましたついでにお訪ねいたさないことは、志のないもののように、誤解を受けましようから、あちらへも参りましよう」

と源氏は言つて、縁側伝いに行つた。もう暗くなつたころであつたが、鈍色にびの縁の御簾みすに黒い几帳きちようの添えて立てられてある透影すきかげは身にしむものに思われた。薰物たきものの香が風について吹き通う艶えんなお住居すまいである。外は失礼だと思つて、女房たちの計らいで南の端の座敷の席が設けられた。女房の宣旨せんじが応接に出て取り次ぐ言葉を待っていた。

「今になりました、お居間の御簾の前などにお席をいただくことかと私はちよつと戸惑いがされます。どんなに長い年月にわたつて私は志を申し続けてきたことでしよう。その労に酬むくいられて、お居間へ伺うくらいのことは許されていていかと信じてきましたが」

と言つて、源氏は不満足な顔をしていた。

「昔というものは皆夢でございまして、それがさめたのちのはかない世かと、それもまだよく決めて思われません境地にただ今はおります私ですから、あなた様の労などは静かに考えさせていただいたのちに定めなければと存じます」

女王の言葉の伝えられたのはこれだった。だからこの世は定めがたい、頼みにしがたいのだと、こんな言葉の端からも源氏は悲しまれ

た。

「人知れず神の許しを待ちしみにこころつれなき世を過ぐすかな

ただ今はもう神に託しておのがれになることもできないはずです。

一方で私が不幸な目にあっていました時以来の苦しみの記録の片端でもお聞きくださいませんか」

源氏は女王と直接に会見することをこう言って強要するのである。

そうした様子なども昔の源氏に比べて、より優美なところが多く添ったように思われた。その時代に比べると年はずつと行ってしまった源氏ではあるが、位の高さにはつりあわぬ若々しさは保存されていた。

なべて世の哀ればかりを問ふからに誓ひしことを神やいさめん

10

と齋院のお歌が伝えられる。

「そんなことをおとがめになるのですか。その時代の罪は皆科戸しなどの風に追ってもらったはずです」

源氏の愛嬌あいぎょうはこぼれるようであつた。

「この御禊みそぎを神は（恋せじとみたらし川にせし御禊みそぎ神は受けずもなりにけるかな）お受けになりませんそうですね」

宣旨は軽く戯談じようだんにしては言っているが、心の中では非常に気の毒だと源氏に同情していた。羞恥しゅうち深い女王は次第に奥へ身を引いておしまいになって、もう宣旨にも言葉をお与えにならない。

「あまりに哀れに自分が見えすぎますから」

と深い歎息たんそくをしながら源氏は立ち上がった。

「年が行ってしまふと恥ずかしい目にあうものです。こんな恋の憔悴しょうすい者にせめて話を聞いてやろうという寛大な気持ちをお見せになりましたか。そうじゃない」

こんな言葉を女房に残して源氏の帰ったあとで、女房らはどこの女房も言うように源氏をたたえた。空の色も身にしむ夜で、木の葉の鳴る音にも昔が思われて、女房らは古いころからの源氏との交渉のあったある場面場面のおもしろかったこと、身に沁しんだことも心に浮かんでくると言つて齋院にお話し申していた。

不満足な気持ちで帰って行つた源氏はましてその夜が眠れなかつ

た。早く格子こうしを上げさせて源氏は庭の朝霧をながめていた。枯れた花の中に朝顔が左右の草にまつわりながらあるかないかに咲いて、しかも香さえも放つ花を折らせた源氏は、前斎院へそれを贈るのであった。

あまりに他人らしくお扱いになりましたから、きまりも悪くなつて帰りましたが、哀れな私の後ろ姿をどうお笑いになったことかと口くち惜おしい氣もしますが、しかし、

見し折りのつゆ忘れぬ朝顔の花の盛りは過ぎやしぬらん

どんなに長い年月の間あなたをお思ひしているかということだけは

知っていただくはずだと思ひまして、私は歎なげきながらも希望を持っております。

という手紙を源氏は書いたのである。真正面から恋ばかりを言われているでもない中年の源氏のおとなしい手紙に対して、返事をせぬことも感情の乏しい女と思われることであろうと女王もお思いになり、女房たちもそう思つて硯すずりの用意などしたのでお書きになった。

秋はてて霧の籬まがきにむすぼほれあるかなきかにうつる朝顔

秋にふさわしい花をお送りくださいましたことででももの哀れな気持ちになつております。

とだけ書かれた手紙はたいしておもしろいものでもないはずであるが、源氏はそれを手から放すのも惜しいようにじつとながめていた。

青鈍色あおにびの柔らかい紙に書かれた字は美しいようであつた。書いた人の身分、書き方などが補つてその時はよい文章、よい歌のように思われたことも、改めて本の中へ書き載せると拙つたない点の現われてくるものであるから、手紙の文章や歌というようなものは、この話の控え帳に筆者は大部分省くことにしていたので、採録したものにも書き誤りがあるであらうと思われる。

今になってまた若々しい恋の手紙を人に送るようなことも似合わないくないことであると源氏は思ひながらも、昔から好意も友情もその人に持たれながら、恋の成り立つまでにはならなかったのを思うと、も



うあとへは退<sup>ひ</sup>けない気になっていて、再び情火を胸に燃やしながら心をこめた手紙を續いて送っていた。東の対のほうに離れていて、前斎院の宣旨を源氏は呼び寄せて相談をしていた。

女房たちのだれの誘惑にもなびいて行きそうな人々は狂気にもなるほど源氏をほめて夢中になっているこんな家の中で、朝顔の女王だけは冷静でおありになった。お若い時すらも友情以上のものをこの人にお持ちにならなかったのであるから、今はまして自分もその人も恋愛などをする年ではなくなっていて、花や草木のことの言われる手紙にもすぐに返事を出すようなことは人の批評することがうるさいと、それとも遠慮をされるようになっていつまでたってもお心の動く様子はなかった。

初めの態度はどこまでもお続けになる朝顔の女王の普通の型でない点が、珍重すべきおもしろいことにも思われてならない源氏であつた。世間はもうその噂うわさをして、

「源氏の大臣は前斎院に御熱心でいられるから、女五の宮へ御親切もお尽くしになるのだらう、結婚されて似合いの縁というものであるらう」

とも言うのが、紫夫人の耳にも伝わって来た。当座はそんなことがあつても自分へ源氏は話して聞かせるはずであると思つていたが、それ以来氣をつけて見ると、源氏の様子はそわそわとして、何かに心の奪われていることがよくわかるのであつた。こんなにまじめに打ち込んで結婚までを思ふ恋を、自分にはただ氣紛れですることのように良おつ

人は言っていた。同じ女王ではあっても世間から重んぜられていることは自分と比較にならない人である。その人に良人の愛が移ってしまつたなら自分はみじめであろう、と夫人は歎なげかれた。さすがに第一の夫人として源氏の愛をほとんど一身に集めてきた人であつたから、今になつて心の満たされない取り扱いを受けることは、外へ対しても堪えがたいことであると夫人は思うのである。顧みられないというようなことはなくとも、源氏が重んじる妻は他の人で、自分は少女時代から養つてきた、どんな薄遇をしても甘んじているはずの妻にすぎないことになるのであらうと、こんなことを思つて夫人は煩悶はんもんしているが、たいしたことでないことはあまり感情を害しない程度の夫人の恨み言にもなつて、それで源氏の恋愛行為が牽制けんせいされることにもなるの

であつたが、今度は夫人の心の底から恨めしく思うことであつたから、何ともその問題に触れようとしない。外をながめて物思いを絶えずするのが源氏であつて、御所の宿直とのいの夜が多くなり、役のようにして自宅ですることは手紙を書くことであつた。噂に誤りがないらしいと夫人は思つて、少しくらいは打ち明けて話してもよさそうなものであると、飽き足りなくばかり思つた。

冬の初めになつて今年は神事がいつさい停止されていて寂しい。つれづれな源氏はまた五の宮を訪ねに行こうとした。雪もちらちらと降つて艶えんな夕方に、少し着て柔らかになつた小袖こそでになお薫物たきものを多くしたり、化粧に時間を費やしたりして恋人を訪とおうとしている源氏であるから、それを見ていて気の弱い女性はどんな心持ちがするであろう

と危あやぶまれた。さすがに出かけの声をかけに源氏は夫人の所へ来た。

「女五の宮様が御病気でいらっしゃるからお見舞いに行つて来ます」

ちよつとすわつてこう言う源氏のほうを、夫人は見ようともしせずに姫君の相手をしていたが、不快な気持ちにはよく見えた。

「始終このごろは機嫌きげんが悪いではありませんか、無理でないかもしれない。長くいっしょにいてはあなたに飽かれると思つて、私は時々御所で宿直とのいをしたりしてみるのが、それでまたあなたは不愉快になるのですね」

「ほんとうに長く同じであるものは悲しい目を見ます」

とだけ言つて向こうを向いて寝てしまった女王を置いて出て行くことはつらいことに源氏は思いながらも、もう御訪問の報しらせを宮に申し

上げたのちであつたから、やむをえず二条の院を出た。こんな日も自分の上にめぐってくるのを知らずに、源氏を信賴して暮らしてきたと寂しい気持ちに夫人はなつていた。喪服の鈍色にびではあるが濃淡の重なりえんの艶な源氏の姿が雪の光あかりでよく見えるのを、寝ながらのぞいていた夫人はこの姿を見ることも稀まれな日になつたらと思ふと悲しかった。前駆も親しい者ばかりを選んであつたが、

「参内する以外の外出はおつくうになつた。桃園の女五によごの宮様みやは寂しいお一人ぼっちなのだからね、式部卿しきぶきやうの宮がおいになつた間は私もお任せしてしまつていたが、今では私がたよりだとおつしやるのでね、それもごもつともでお氣の毒だから」

などと、前駆を勤める人たちにも言いわけらしく源氏は言つていた

が、

「りっぱな方だけれど、恋愛をおやめにならない点が傷だね。御家庭がそれで済むまいと心配だ」

とそうした人たちも言っていた。

桃園のお邸は北側にある普通の人の出入りする門をはいるのは自重の足りないことに見られると思って、西の大門から人をやって案内を申し入れた。こんな天気になったから、先触れはあっても源氏は出かけて来ないであろうと宮は思っておいでになったのであるから、驚いて大門をおあけさせになるのであった。出て来た門番の侍が寒そうな姿で、背中がぞつとするというふうをして、門の扉をかたかたといわせているが、これ以外の侍はいないらしい。

「ひどく錠が錆び<sup>さ</sup>びていてあきません」

とこぼすのを、源氏は身に沁<sup>し</sup>んで聞いていた。宮のお若いころ、自身の生まれたころを源氏が考えてみるとそれはもう三十年の昔になる、物の錆びたことによつて人間の古くなつたことも思われる。それを知りながら仮の世の執着が離れず、人に心の惹<sup>ひ</sup>かれることのやむ時がない自分であると源氏は恥じた。

いつのまに蓬<sup>よもぎ</sup>がもとと結ばほれ雪ふる里と荒れし垣<sup>かきね</sup>根ぞ

源氏はこんなことを口ずさんでいた。やや長くかかつて古い門の抵抗がやつと征服された。



源氏はまず宮のお居間のほうで例のように話していたが、昔話の取りとめもないようなのが長く続いて源氏は眠くなるばかりであつた。

宮もあくびをあそばして、

「私は宵惑よいまじいなものですから、お話がもうできないのですよ」

とお言いになったかと思うと、鼾いびきという源氏に馴染なじみの少ない音が聞こえだしてきた。源氏は内心に喜びながら宮のお居間を辞して出ようとする、また一人の老人らしい咳せきをしながら御簾みすぎわに寄つて来る人があつた。

「もつたいないことですが、ご存じのはずと思つておりますものの私の存在をとくにお忘れになつていらつしやるようでございますから、私のほうから、出てまいりました。院の陛下がお祖母ばあさんとお言

いになりました者でございますよ」

と言うので源氏は思い出した。源典侍げんてんじといわれていた人は尼になつて女五の宮のお弟子分でしでお仕えしていると以前聞いたこともあるが、今まで生きていたとは思いがけないことであるとあきれてしまった。

「あのころのことは皆昔話になつて、思い出してさえあまりに今と遠くて心細くなるばかりなのですが、うれしい方がおいでになりましたね。『親なしに臥ふせる旅人』と思つてください」

と言いながら、御簾のほうへからだを寄せる源氏に、典侍ないしのすけはいつそう昔が帰つて来た気がして、今も好色女らしく、齒の少なくなった曲がつた口もとも想像される声で、甘えかかろうとしていた。

「とうとうこんなになつてしまったじゃありませんか」

などとおくめんなしに言う。今はじめて老衰にあつたような口ぶりであるとおかしく源氏は思いながらも、一面では哀れなことに予期もせず触れた気もした。この女が若盛りのころの後宮こうきゅうの女御にょご、更衣こういはどうなつたかという、みじめなふうになつて生き長らえている人もあるであらうが大部分は故人である。入道の宮などのお年はどうであらう、この人の半分にも足りないでお崩れかぐになつたではないか、はかないのが姿である人生であるからと源氏は思いながらも、人格がよいともいえない、ふしだらな女が長生きをして気楽に仏勤めをして暮らすようなことも不定ふじようと仏のお教えになつたこの世の相であると、こんなふうに感じて、気分がしんみりとしてきたのを、典侍は自身の魅力の反映が源氏に現われてきたものと解して、若々しく言う。

年経れどこの契りこそ忘れね親の親とか言ひし一こと

源氏は悪感おかんを覚えて、

「身を変へて後あとも待ち見よこの世にて親を忘るるためしありやと

頼もしい縁ですよ。そのうちにまた」

と言つて立つてしまった。

西のほうはもう格子が下ろおしてあつたが、迷惑おがるように思われてはと斟酌しんしゃくして一間二間はそのままにしてあつた。月が出て淡い雪の光といっしょになった夜の色が美しかった。今夜は真剣なふうに恋を訴

える源氏であつた。

「ただ一言、それは私を憎むということでも御自身のお口から聞かせてください。私はそれだけをしていただいただけで満足してあきらめようと思います」

熱情を見せてこう言うが、女王によおうは、自分も源氏もまだ若かつた日、

源氏が今日のような複雑な係累もなく、どんなことも若さの咎とがで済む時代にも、父宮などの希望された源氏との結婚問題を、自分はその気になれずに否いなんでしまった。ましてこんなに年が行つて衰えた今になつては、一言でも直接にものを言ったりすることは恥ずかしくてできないとお思ひになつて、だれが勧めてもそうしようとされないのを、源氏は非常に恨めしく思った。さすがに冷淡にはお取り扱いには

ならないで、人づてのお返辞はくださるというのであったから、源氏は悶々とするばかりであつた。次第に夜がふけて、風の音もはげしくなる。心細さに落ちる涙をぬぐいながら源氏は言う。

「つれなさを昔に懲りぬ心こそ人のつらさに添へてつられ

『心づから』（恋しさも心づからのものなれば置き所なくもてぞ煩ふ）苦しみます」

「あまりにお気の毒でございますから」

と言って、女房らが女王に返歌をされるように勧めた。

「改めて何かは見えん人の上にかかりと聞きし心変はりを

私はそうしたふうになつていきません」

と女房が齋院のお言葉を伝えた。力の抜けた気がしながらも、言うべきことは言い残して帰って行く源氏は、自身がみじめに思われてならなかった。

「こんなことは愚かな男の例として噂うわさにもなりそうなことですから人には言わないでください。『いさや川』（犬上いぬがみの）この山なるいさや川いさとこたへてわが名もらすな）などというのも恋の成り立った場合の歌で、ここへは引けませんね」

と言って源氏はなお女房たちに何事かを頼んで行つた。

「もったいない気がしました。なぜああまで気強くなさるのでしょう。少し近くへお出ましになっても、まじめに求婚をしていらつしやるだけですから、失礼なことなどの起こってくる気づかいはないでしょうのに、お気の毒な」

とあとで言う者もあつた。齋院は源氏の価値をよく知つておいでになつて愛をお感じにならないのではないが、好意を見せても源氏の外<sup>がい</sup>貌<sup>ぼう</sup>だけを愛している一般の女と同じに思われることはいやであると思つておいでになつた。接近させて下にかくしたこの恋を源氏に看破されるのもつらく女王はお思いになるのである。友情で書かれた手紙には友情で酬<sup>むく</sup>いることにして、源氏が来れば人づてで話す程度のことにしたいとお思いになつて、御自身は神に奉仕していた間怠つていた



仏勤めを、取り返しうるほど十分にできる尼になりたいとも願っておいでになるのであるが、この際にわかにそうしたことをするのも源氏へ濟まない、反抗的の行為であるとも必ず言われるであろうと、世間が作る噂うわさというものの苦しさを経験されたお心からお思いになった。

女房たちが源氏に買収されてどんな行為をするかもしれないかという懸念から女王はその人たちに対してもお氣をお許しにならなかった。そして追い追い宗教的な生活へ進んでお行きになるのであった。女王は男の兄弟も幾人か持っておいになるのであるが同腹でなかったから親しんで来る者もない。宮家の財政も心細くなった際に、源氏が熱心な求婚者として出て来たのであるから、女たちは一人残らず結婚の成り立つことばかりを祈っていた。

源氏はあながちにあせって結婚がしたいのではなかったが、恋人の冷淡なのに負けてしまうのが残念でならなかった。今日の源氏は最上の運に恵まれてはいるが、昔よりはいろいろなことに経験を積んできていて、今さら恋愛に没頭することの不可なことも、世間から受ける批難も知っていながらしていることで、これが成功しなければいよいよ不名誉であると信じて、二条の院に寝ない夜も多くなったのを夫人は恨めしがっていた。悲しみをおさえる力も尽きることがあるわけである。源氏の前で涙のこぼれることもあった。

「なぜ機嫌きげんを悪くしているのですか、理由わけがわからない」

と言いいながら、額髪ひたいがみを手で払ひつてやり、憐あわれんだ表情で夫人の顔を源氏がながめている様子などは、絵に描かきたいほど美しい夫婦と見え

た。

「女院がお崩れ<sup>かく</sup>になつてから、陛下が寂しそうにばかりしておいでになるのが心苦しいことだし、太政大臣が現在では欠けているのだから、政務は皆私が見なければならなくて、多忙なために家へ歸<sup>うち</sup>らない時の多いのを、あなたから言えば例のなかったことで、寂しく思うのももつともだけれど、ほんとうはもうあなたの不安がることは何もありませんよ。安心しておいでなさい。大人になつたけれどまだ少女のように思いやりもできず、私を信じることもできない、可憐<sup>かれん</sup>なばかりのあなたなのだろう」

などと言いながら、優しく妻の髪を直したりして源氏はいるのであったが、夫人はいよいよ顔を向こうへやってみてしまつて何も言わな

い。

「若々しい我儘わがままをあなたがするの私のつけた癖なのだ」

歎息たんそくをして、短い人生に愛する人からこんなにまで恨まれているのも苦しいことであると源氏は思った。

「斎院との交際で何かあなたは疑っているのではないのですか。それはまったく恋愛などではないのですよ。自然わかってくるでしょうがね。昔からあの人はそんな気のないいつふう変わった女性なのです。私の寂しい時などに手紙を書いてあげると、あちらはひまな方だから時々は返事をくださるのです。忠実に相手になってもくださらないと、そんなことをあなたにこぼすほどのことでもないから、いちいち話さないだけです。気がかりなことではないと思い直してください

い」

などと言つて、源氏は終日夫人をなだめ暮らした。

雪のたくさん積もった上になお雪が降っていて、松と竹がおもしろく変わった個性を見せている夕暮れ時で、人の美貌びぼうもことさら光るように思われた。

「春がよくなったり、秋がよくなったり、始終人の好みの変わる中で、私は冬の澄んだ月が雪の上にさした無色の風景が身に沁しんで好きに思われる。そんな時にはこの世界のほかの大世界までが想像されてこれが人間の感じる極致の境だという気もするのに、すさまじいものに冬の月を言ったりする人の浅薄あさはかさが思われる」

源氏はこんなことを言いながら御簾みすを巻き上げさせた。月光が明る

く地に落ちてすべての世界が白く見える中に、植え込みの灌木類かんぼくの押しつけられた形だけが哀れに見え、流れの音も咽むせび声になっている。池の氷のきらきら光るのもすごかった。源氏は童女を庭へおろして雪まろげをさせた。美しい姿、頭つきなどが月の光にいつそうよく見えて、やや大きな童女たちが、いろいろなあこめ袖あこめを着て、上着は脱いだ結び帯の略装で、もうずっと長くなっていて、裾すそのひろ拡がった髪は雪の上で鮮明にきれいに見られるのであった。小さい童女は子供らしく喜んで走りまわるうちには扇を落としてしまったりしている。ますます大きくしようとしても、もう童女たちの力では雪の球が動たまかされなくなっている。童女の半分は東の妻戸の外に集まって、自身たちの出て行かないのを残念がりながら、庭の連中のすることを見て笑っていた。

ちゅうぐう

「昔中宮がお庭に雪の山をお作らせになったことがある。だれもすることだけれど、その場合に非常にしつくりと合ったことをなさる方だった。どんな時にもあの方がおいでになったらと、残念に思われることが多い。私などに対して法を越えた御待遇はなさらなかったから、細かなことは拝見する機会もなかったが、さすがに尊敬している私を信用はしてくだすった。私は何かのことがあると歌などを差し上げたが、文学的に見て優秀なお返事でないが、見識があるというよさはおありになって、お言いになることが皆深みのあるものだった。あれほど完全な貴女がほかにあるとは思われない。柔らかに弱々しくいらつしやつて、気高い品のよさがあの方のものだったのですからね。しかしあなただけは血縁の近い女性だけあってあの方によ

く似ている。少しあなたは嫉妬しつとをする点だけが悪いかもしれないね。前斎院の性格はまたまったく変わっておいでになる。私の寂しい時に手紙などを書く交際相手に敬意の払われる、晴れがましい友人としてはあの方だけがまだ残っておいでになると言っていていいでしょう」

と源氏が言った。

「尚侍ないしのかみは貴婦人の資格を十分に備えておいでになる、軽佻けいちような気などは少しもお見えにならないような方なのに、あんなことのあつたのが、私は不思議でならない」

「そうですよ。艶えんな美しい女の例には、今でもむろん引かねばならない人ですよ。そんなことを思うと自分のしたことでは人をそこなつた後悔が起こつてきてならない。まして多情な生活をしては年が行つたあ



とでどんなに後悔することが多いだろう。人ほど軽率なことはしない  
でいる男だと思っていた私でさえこうだから」

源氏は尚侍の話をする時にも涙を少しこぼした。

「あなたが眼中にも置かないように軽蔑けいべつしている山荘の女は、身分以  
上に貴婦人の資格というものを皆そろえて持った人ですがね、思い上  
がってますますよく見えるのも人によることですから、私はその点を  
その人によけいなもののようにも見ておりますがね。私はまだずっと  
下の階級に属する女性たちを知らないが、私の見た範囲でもすぐれた  
人はなかなかないのですよ。東の院に置いてある人の善良さは、若  
い時から今まで一貫しています。愛すべき人ですよ。ああはいかない  
ものですよ。私たちは青春時代から信じ合った、そしてつつましい恋

を続けてきたものです。今になって別れ別れになることなどはできませんよ。私は深く愛しています」

こんな話に夜はふけていった。月はいよいよ澄んで美しい。夫人が、

氷とち岩間の水は行き悩み空澄む月の影ぞ流るる

と言いながら、外を見るために少し傾けた顔が美しかった。髪たの性質ち、顔だちが恋しい故人の宮にそっくりな気がして、源氏はうれしかった。少し外に分けられていた心も取り返されるものと思われた。

鴛鴦おしどりの鳴いているのを聞いて、源氏は、

かきつめて昔恋しき雪もよに哀れを添ふる鴛鴦をしのうきねか

と言つていた。

寢室にはいつてからも源氏は中宮の御事を恋しく思いながら眠りについたのであったが、夢のようにでもなくほのかに宮の面影が見えた。非常にお恨めしいふうで、

「あんなに秘密を守るとお言いになりましたけれど、私たちのした過あや失まちはもう知れてしまつて、私は恥ずかしい思いと苦しい思いとをしています。あなたが恨めしく思われます」

とお言いになった。返辞を申し上げるつもりでたてた声が、夢に襲われた声であつたから、夫人が、

「まあ、どうなさいました、そんなに」

と言ったので源氏は目がさめた。非常に残り惜しい気がして、張り裂けるほどの鼓動を感じる胸をおさえていると、涙も流れてきた。夢のまったく醒めたのちでも源氏は泣くことをやめないものであった。夫人はどんな夢であつたのであろうと思うと、自分だけが別物にされた寂しさを覚えて、じつとみじろぎもせずには寝ていた。

とけて寝ぬ寝覚めさびしき冬の夜に結ばほれつる夢のみじかさ

源氏の歌である。夢に死んだ恋人を見たことに心は慰まないで、かえって恋しさ悲しさのまさる気のする源氏は、早く起きてしまつて、

何とは表面に出さずに、誦經ずきようを寺へ頼んだ。苦しい目を見せるとお恨みになったのもきつとそういう気のあるあそばすことであろうと源氏に悟れるところがあつた。仏勤めをなされたほかに民衆のためにも功德を多くお行ないになつた宮が、あの一つの過失のためにこの世での罪障が消滅し尽くさずにいるかと、深く考えてみればみるほど源氏は悲しくなつた。自分はどんな苦行をしても寂しい世界に贖罪しよくざいの苦しみをしておいでになる中宮の所へ行つて、罪に代わつておあげすることがしたいと、こんなことをつくづくと思い暮らしていた。中宮のために仏事を自分の行なうことはどんな簡単なことであつても世間の疑いを受けることに違いない、帝みかどの御心の鬼おぼしめに思召し合はすことになつてもよろしくないと思はれ、源氏ははばかりかれて、ただ一人心中で阿弥陀あみだぶつを念じ続け

た。同じ蓮華れんげの上に生まれしめたまえと祈ったことであろう。

なき人を慕ふ心にまかせてもかげ見ぬ水の瀬にやまどはん

と思うと悲しかったそうである。

（訳注） 源氏の君三十二歳。

### 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---